

# 検証特集

## 高齢者施設 今も続く闘い

気がかめ間に広がった高齢者施設での新型コロナウイルス感染はついにすみやかな平穏な生活を奪った。病床逼迫で入院できず、孤立を深める入所者。拡大を食い止めるようと防護服で介する職員たち。国の対応が後手に回る中、最前線の闘いは続く。

## 近隣からの誹謗中傷追い打ち

① 早起はいいけれど  
② 207陽性者 日第

早出1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
日勤リーダー	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	1	0	0
日勤フリー	2	2	2	1	2	1	1	1	2	6	5	4	4	6
準夜勤	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	1	0
夜勤	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	0	1
明け	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	0

# 過酷勤務 職員らに無力感

最初の感染確認は一月九日。二階に併設されたデイサービスに通う人だった。保健所からの要請で他の利用者も職員にPCR検査を行うことになったが、具体的な指示はない。送迎ルーートの調整から建物内を区分けするゾーニングまでわずか一日で準備した。「全てが手探りだった」と施設長の寺田幸夫さん(仮名)。デイや特養などの計二十三人と、職員八人の陽性が判明した。

「コロナ禍で家族と会えず、楽しんでいた行事や交流がなくなり、落ち込む高齢者たち。認知症のため状況が分からず、「なぜ部屋から出られないのか」と

「リトルガーデン」(仮名)のクラスター発生状況

3F	1月25日 発熱	入所者31人 (うち8人死亡) 職員9人
2F	1月9日 初感染	特養やデイなど入所者23人 (うち1人死亡) 職員8人

※死亡者数は3月2日時点

特養「リトルガーデン」(仮名)のクラスター発生当時の勤務表=1月、兵庫県内で(同施設提供)

職員をさらに追い詰めたのは、いわれなき誹謗中傷だ。近隣の掲示板には施設に「近づくな」と書かれた紙が張られた。リネン類は消毒済みにの回収されず、「ゴミ置き場に残されたまま。職員が宿泊するホテルではベッドのシーツを交換しても見えぬ日もあった。悪意はないと分かっている、やるせないかった。

昨年秋以降の第三波で病床は逼迫し、保健所からは「入院は難しい」と同じ回答が続く。保健師が毎日様子を見に来たは、怒る人もいた。

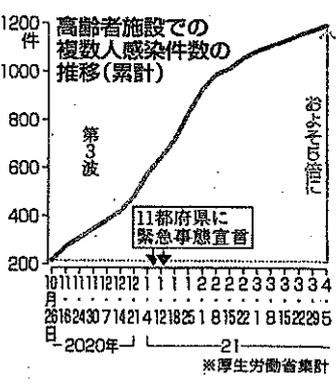
細心の注意を払う中で再び起きてしまった感染拡大。完全に防ぐことは難しいと痛感した寺田さんは「早期発見には定期的な検査が重要で、費用も含めた行政支援が必要だ」と訴える。

三月二日、最後の患者が回復した。しかし寺田さんの表情は晴れない。心身の限界まで追い込まれた職員は完全には癒えていないからだ。「私たちのクラスターは、まだ続いているんです」



## 1000件超す複数感染 飲食店など上回る

厚生労働省によると、高齢者施設で複数の新型コロナウイルス感染者が出た例は累計千二百九十八件(四月五日時点)。施設別では最多で、医療機関や飲食店を上回る。第三波では、それまでの約五倍に急増。高齢者は重症化しやすく、病床逼迫の要因の一つになった。政府は自治体に介護職員への検査徹底を求めているが、緊急事態宣言が出ている自治体に集中的な実施を求めたのは二月になってからで、対策は後手に回った。



複数人感染の施設別内訳

※4月5日時点、厚生労働省調べ

学校教育施設など	698
学校施設など	1007
医療機関	5935
飲食店	1096
企業など	1107
その他施設など	829
高齢者施設	1193

統計画(BCC)策定を義務づけた。

# 入所者 苦渋の面会制限

画面やガラス越しに見る互いの顔に切なさが募る。「会わせてやりたい」とシレンマを感じる職員。新型コロナウイルスの影響で、高齢者施設の多くは入所者と家族らの面会を制限した。専門家は「高齢者の心身への影響を考えると、デメリットの方が大きい」と指摘。一方、施設側は「クラスターが起きたら、世間から責められる」と漏らす。

「ちゃんとご飯食べてる？」  
「食べてるよ」  
三月上旬、群馬県渋川市の特養「永光荘」。入所者の益子兼次さん(80)が、タブレット端末に映る長男、一さん(38)の問い



タブレット端末に映る長男の一さんと話す益子兼次さん(手前) 11月3月10日 群馬県渋川市の特養「永光荘」で

掛けに答えた。「会えるようになったら、おやじと話したいことがいっぱいある」。一さんはそう切望する。

同ホームはコロナの感染が広がりはじめた昨年二月、面会を中止。六月からはマスク着用などの感染防止策を取った上で短時間での対面にしたが、県の基準で禁止されたため、十二月から原則オンライン面会のみとした。村上恵明施設長(左)は「県の基準は厳し過ぎると思うが、対面に戻して方がクラスターが起きたら…」と悩まされた。

「家族は施設のPHSを使って、外のテラスから建物内の高齢者に声を届ける。「入所者の生活の質と感染防止の両方を考えた」。渡辺純子園長(左)は苦渋の判断だったと明かす。

広島大などが高齢者向けの医療・介護施設を対象に昨年六月に実施した調査では、回答した九百四十五カ所の98・5%が面会を制限。四割近くの施設は、刺激が少なくなったことで認知症の人に心身の機能低下などの影響が見られたと答えた。北海道医療大の塚本容子教授(感染看護学)は「手指消毒や適切なマスク着用などの対策を徹底すれば、対面でも感染リスクはかかなり低く、多少であれば体に触れても問題ない。面会制限は過剰反応だ」と指摘している。

## 初動が大切に 平川博之・都医師会副会長

特養など高齢者施設の入所、入居者は200万人を超える。クラスター発生が相次いでいるが、ワクチン接種が進めば局面が変わると期待している。医療崩壊と介護崩壊は表裏一体で、両にらみの対策が肝要だ。

クラスターが起きた施設に共通するのは、発熱者が出た際に「もうちょっと様子を見てから」と直ちに対応していない点だ。初動が大切になる。

感染のピーク時に、感染した施設入所者が入院を断られるケースがあったが、食事や排せつ、入浴のケアには「3密」が避けられず、施設に留め置くことはリスクが高い。原則入院が

望ましい。

一方、回復した高齢者が退院後、行き場がない例もある。介護老人保健施設では、こうした人を受け入れる動きが広がっている。

現在、感染防止策として高齢者施設の職員にPCR検査が行われている。陽性者が見つければ事業に支障が出るとの懸念もあるようだが、抗原検査を組み合わせるなど簡便化し、定期的に実施してほしい。



ひらかわ・ひろき 全国老人保健施設協会副会長。介護老人保健施設ハートランド・ぐらんぱぐらんま理事長。

次回は11日に掲載予定です